

広島には“都市計画”ではなく“都市戦略”を ——サッカースタジアム建設候補地選定を巡る議論より——

三 浦 浩 之

(受付 2014 年 10 月 31 日)

1. は じ め に

昨年6月より、広島県サッカー協会、広島県、広島市及び広島商工会議所からの要請により、委員各位が個人の立場で、サッカースタジアムの「あるべき姿」を議論し、サッカースタジアム整備に係る課題への具体的かつ実践的な解決策を取りまとめ、行政や経済界へ提案する、サッカースタジアム整備のための検討協議会が設置された。私はこのサッカースタジアム検討協議会の会長を務め、「広島におけるサッカー専用スタジアムについて、その規模、建設場所、管理運営方法、事業スキーム、事業収支、類似施設との棲み分けなどといった整備に係る諸課題について議論し、解決策（あるべき姿）のとりまとめ」を行ってきた。

そこでの議論において、昨今の都市間競争の激しい状況を鑑みて、今後の広島の都市経営戦略の一つとして“スポーツ振興”によるまちづくりや地域活性化が重要であり、サッカースタジアムは、広島の魅力向上、にぎわい創出のための重要なツールになり得るものと位置付けた。また、国内外に対して、その固有の存在感により多くの人々を魅了する広島（市）に、世界レベルのサッカースタジアムを建設することによって、サッカーを通じた地域交流や国際交流が大いに期待できることから、サッカースタジアムの整備は広島県及び広島市のまちづくりの方向性に合うものであるという意識が協議会委員間で醸成された。

これらを受けて、幾つかのサッカースタジアム建設候補地の絞り込みに着手したのであるが、その検討過程において、広島市・広島県の策定している都市計画や総合計画等における、各候補地（都市内の未利用・低利用な大規模用地）やそれらの立地する地域の将来的な有り様が具体性を欠くものであることがわかり、都市計画等の限界性を強く認識した。

これまでの「都市計画」等を基本とする都市の将来設計は条件整理に留まっており、本来に必要とされる都市の将来像を描いていないこと、激化している都市間競争下において都市が生き残るには競合都市との差別化を図る「都市戦略」が必要であることを、本論文では述べていく。

2. 「都市計画」と「都市戦略」

(1) 都市計画の担う事柄

「都市計画」とは、農林漁業との健全な調和を図りつつ、健康で文化的な都市生活及び機能的な都市活動を確保すべきこと並びにこのためには適正な制限のもとに土地の合理的な利用が図られるべきことを基本理念として定めるものであり、都市の健全な発展と秩序ある整備を図るための土地利用、都市施設の整備及び市街地開発事業に関する計画を指す（都市計画法）。

また、ここでの都市施設とは

- ① 道路、都市高速鉄道、駐車場、自動車ターミナルその他の交通施設
- ② 公園、緑地、広場、墓園その他の公共空地
- ③ 水道、電気供給施設、ガス供給施設、下水道、汚物処理場、ごみ焼却場その他の供給施設又は処理施設
- ④ 河川、運河その他の水路
- ⑤ 学校、図書館、研究施設その他の教育文化施設
- ⑥ 病院、保育所その他の医療施設又は社会福祉施設
- ⑦ 市場、と畜場又は火葬場
- ⑧ 一団地の住宅施設（一団地における五十戸以上の集団住宅及びこれらに附帯する通路その他の施設をいう。）
- ⑨ 一団地の官公庁施設（一団地の国家機関又は地方公共団体の建築物及びこれらに附帯する通路その他の施設をいう。）
- ⑩ 流通業務団地
- ⑪ 一団地の津波防災拠点市街地形成施設
- ⑫ 一団地の復興拠点市街地形成施設
- ⑬ その他政令で定める施設

“都市の健全な発展と秩序ある整備を図る”ために、“都市計画区域の整備、開発及び保全の方針を定める”ことを担っているのであるが、今回の協議会での検討を通じて、「都市計画」とは、都市に必要な施設や社会基盤等を造り出すツールではなく、造ってもらうための環境を整えるものであるという位置付けであることを認識した。他都市に負けない都市をつくるといった一歩踏み込んだ、自ら打って出る様な「都市戦略」は含有されていない。都市を魅力あるものにするためには、「都市戦略」が必要な時代になっていることに、都市計画は対応できていないと考える。

(2) 都市計画運用指針にみる都市計画の拡張

都市計画の運用について整理している「都市計画運用指針（第7版）」（平成26年8月1日一部改正）でも、現行の都市計画法について次のように述べている。

「現行の都市計画法は、昭和30年代後半からの高度成長の過程で、都市への急速な人口・諸機能の集中が進み、市街地の無秩序な外延化が全国共通の課題として深刻化していた社会経済状況を背景に、線引き制度、開発許可制度等の導入を骨格として昭和43年に制定されたものである。以来、基本的には都市計画制度の運用の面においても、こうした新たな枠組みに対応して、スプロールの防止を図る一方、計画的な新市街地の開発・誘導に重点が置かれるなど、集中する人口や諸機能を都市内でいかに適正に配置するかという考え方が反映された運用の積み重ねが行われてきたものといえよう。」

すなわち、人々の居住空間の配置に主眼が置かれてきたと言える。さらに、最近の情勢を踏まえて、次のように述べている。

「しかしながら、人口減少・超高齢社会の到来、モータリゼーションの進展、産業構造の転換、地球環境問題の高まり、厳しい財政的制約など、都市をめぐる社会経済状況は大きく変化してきている。人口については、これまでの一貫した増加基調から減少基調への転換が現実となり、全国的には都市部の人口増加は沈静化し、スプロール対策は全国一律の課題ではなくなりつつある。一方、モータリゼーションの進展等に伴い、人々の生活圏が広域化し、産業についても立地上の制約がなくなるとともに、産業構造の転換等により、工場跡地等における土地利用転換も生じている。さらに、地球環境問題や行政コストの削減等への対応の必要性が高まるとともに、質の高い住まい方、自然的環境や景観の保全・創出に対する国民的意識も高まってきている。

こうした、いわば都市化の時代から安定・成熟した都市型社会への移行という状況に対応するために、これまでも都市計画法の改正が行われてきているところであるが、都市計画制度は実際に使われてこそ有効に機能するものであることからすれば、この運用についても、上に述べた社会経済状況の変化に的確に対応し、新規決定や追加のみならず、見直し・変更や整理を重視して行われることが望まれる。そのためには、制度の企画・立案に責任を有する国として、都市計画制度全般にわたっての考え方を参考として広く一般に示すことが、地方公共団体の制度の趣旨に則った的確な運用を支援していくうえでも効果的である。」

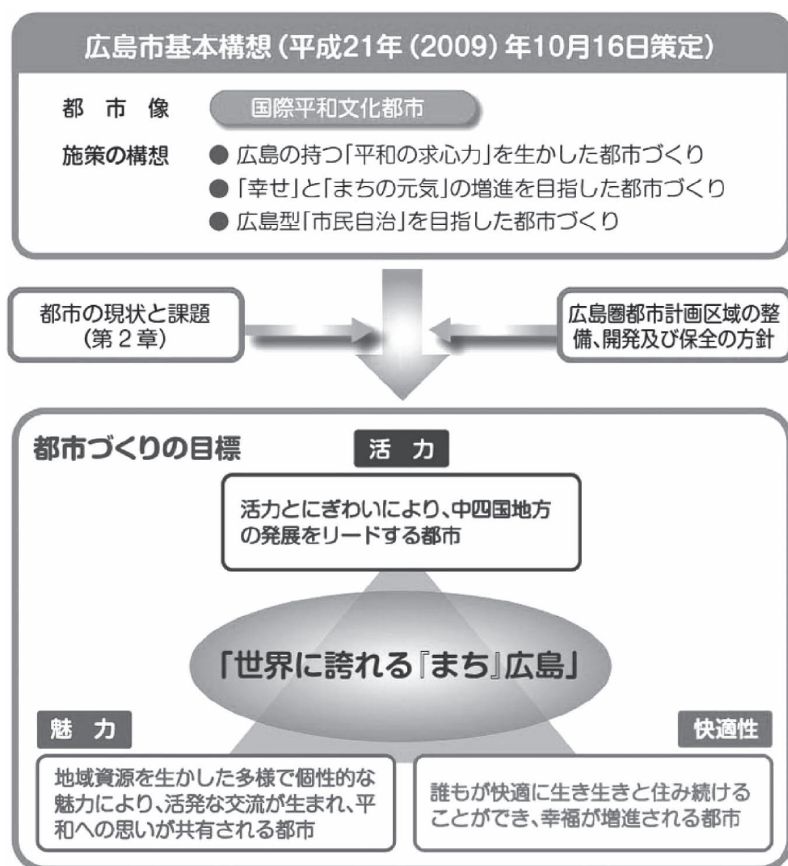
都市をめぐる情勢変化を捉えて、新たな観点からの都市計画の姿を提示していると言える。しかし、やはり、該当する都市単体における視点であり、競合する都市を踏まえての内容とはなっていない。

(3) 広島市の都市計画

広島市の都市づくりの目標や方向性を示したものとしては「広島市都市計画マスタープラン」がある。これは、都市計画法第18条の2に規定される「市町村の都市計画に関する基本的な方針」として、長期的な視点に立った都市づくりの目標やその実現に向けた方向性を明らかにすることを目的としている。

本マスタープランは、人口減少や超高齢化の進行、地球環境問題の深刻化、災害リスクの高まりなど、都市を取り巻く社会経済情勢は近年大きく変化しており、これらに的確に対応することなしに今後の発展は見込めない状況となっていることを踏まえ、平成25年8月に改定された。その改定で、広島市が将来にわたって快適で活力と魅力あふれる都市であり続けることができるよう、新たな課題への対応を踏まえて全体的に見直しを行っている。

都市づくりの目標は次のようになっている。



この目標は次のように概念的なものであり、具体的な戦略、施策は示されていない。

① 活力とにぎわいにより、中四国地方の発展をリードする都市

本市は、中四国地方の中核都市として、市域のみならず、広島県全体の活力を生み、中四国地方の発展に貢献する存在とならなければなりません。その土台となるのは、地域経済の持続的な発展により実現する「活力にあふれにぎわいのあるまち」です。

このため、「活力とにぎわい」を生み出す基盤として、都心及び拠点地区の機能強化に取り組み、圏域全体の発展をリードする都市づくりを進めます。

② 地域資源を生かした多様で個性的な魅力により、活発な交流が生まれ、平和への思いが共有される都市

広島の歴史を伝える魅力的な資源や水と緑に恵まれた自然環境などを生かして、様々な目的を有する幅広い来訪者にアピールできる個性的で魅力あるまちづくりを進めることにより、国内外の多くの人々が訪れ、多様で活発な交流が生み出される都市をめざします。

さらに、こうした資源を活用して、平和都市として建設されてきた本市の歴史を伝えていくための都市環境の形成に取り組み、広島を訪れた人々が平和への思いを共有する都市をめざします。

③ 誰もが快適に生き生きと住み続けることができ、幸福が増進される都市

人口減少・超高齢化や市民ニーズの多様化に対応した質の高い都市空間の形成を図るとともに、災害や犯罪への十分な備えを有する安全・安心な都市づくりを進めます。

さらに、こうした都市の姿が将来にわたって持続するよう、都市経営の効率化と環境負荷の低減にも取り組み、誰もが快適に生き生きと住み続けることができ、幸福が増進される都市をめざします。

これを受けて、都市づくりの方針は次のように定められている。

活力

方針1 ヒト・モノ・カネの広域的な循環を生み出す求心力のある都心の形成

方針2 企業活動を活性化し、地域経済の持続的な発展を支える都市づくり

方針3 既存ストックを活用した効率的・効果的な都市経営

魅力

方針4 広島ならではの資源を活用した都市づくり

方針5 おもてなしの心があふれ、「また来てみたい」「住んでみたい」と思える都市づくり

方針6 美しく品があり、人々に“広島”を印象づけることができる都市景観の創出

快適性

方針7 子どもから高齢者まで、誰もが快適に暮らせるまちづくり

方針8 環境への負荷が少ないスマートな都市づくり

方針9 災害に強く犯罪や事故が起こりにくい、安全・安心な都市づくり

例えば、**方針1 ヒト・モノ・カネの広域的な循環を生み出す求心力のある都心の形成**では、活力とにぎわいのあるまちの実現に向けて、広島の「顔」である都心の求心力を一層高め、ヒト・モノ・カネの県域を越えた大きな循環を生み出していく必要があるとしている。そして、これを行うためには、広島の陸の玄関である広島駅周辺地区と紙屋町・八丁堀地区を都心の東西の核と位置付け、それぞれが活力とにぎわいのエンジンを持ち、相互に刺激し高め合うような「楕円形の都心づくり」を進めていくこととしている。

また、大規模未利用地4箇所（二葉の里地区、旧広島市民球場跡地、広島大学本部跡地、広島西飛行場跡地）について、都市全体を視野に入れた都市機能の分担・配置を考慮しながら、広島の底力を引き出せるよう、将来を見据えたしっかりした活用を図っていくこととしている。

すなわち、今回、サッカースタジアム建設候補地として挙げられた、旧広島市民球場跡地、中央公園自由広場・芝生広場等は、紙屋町にあって、都心の西の核となる場所にあることから、『活力とにぎわいのエンジン』となることが求められている。さらに、旧広島市民球場跡地は広島の底力を引き出せるようなしっかりした活用を図っていくことが求められている。

しかし、では、その求められている事柄をどう実現化していくかは、都市計画マスタープランでは語られていない。望まれる方向性を示しているだけである。

さらに、分野別方針において、市街地の土地利用について言及しているが、紙屋町・八丁堀地区については次のように記述しているだけであり、「高密度で快適な商業・業務系市街地の形成」を進める具体的な戦略は示されていない。

紙屋町・八丁堀地区において、既存の都市機能の集積と都市基盤を生かした高密度で快適な商業・業務系市街地の形成を進めます。

——既存ストックの更新や土地の高度利用などにより、商業・業務施設や文化・交流施設等の集積を進めます。

——都心で暮らす人や来訪者が安心して楽しく回遊できる歩行環境を整備します。

また、宇品地区のような拠点地区については、その機能の充実・強化を進めるとされているが、やはり、どうやって機能の充実・強化を進めるかについては示されていない。

- 広域的な都市機能を担う拠点地区において、恵まれた交通条件を生かし、高次都市機能の集積や都心を補完する商業・業務施設の立地を誘導します。
- 地域的な都市機能を担う拠点地区において、行政区レベルの拠点性を支える商業・業務施設の立地を誘導します。
- 地域特性に応じて高齢者向けの医療・福祉等サービス機能の集積を進めます。

このように、都市計画において、都市づくりの目標やその実現に向けた方向性は定まっているものの、具体的にそれをどう実現化していくかという戦略は有していないのが現実である。

3. 都市間競争

「都市戦略」を考える上で必要なことは、経済のグローバル化が進む中で、世界中の都市が「都市間競争」をしているということである。東京が世界の主要都市との競争を強いられるように、国内においても地方都市は東京と、あるいは地方都市同士が熾烈な競争を強いられる時代になっている。

東京一極集中と地方の疲弊が問題視されている。働く場所や学ぶ場所を求めて地方から都市へ、とくに東京都市圏へ移住する住民が多い。このため、地方は若年層を中心に人口が減少し、企業も出て行って、疲弊している。

一方、東京もグローバルな観点から厳しい競争下にあり、アジアの各都市（シンガポール、香港、北京、上海など）に追い越されようとしている。

居住する人が減り、立地する企業が減ると、都市財政での収入が減少し、都市の経営ができなくなる（破綻へ）。

地方自治体がそれぞれの地域性や空間的特徴などの個性（特色）をいかし、創意工夫を凝らした政策を開発して、他地域から住民や企業等を獲得することが求められている。

経営学者のピーター・ドラッカーは、企業の事業目的を「顧客を創造することである」と言っている。これを都市に置き換えると、都市（地方自治体）の目的は「住民を創造すること」、すなわち、都市間競争は「住民を創造」するための競争であり、「住民の獲得（中で若い人を育てる、外から人を獲得する）」が目的となる。

都市間競争に敗れるということは、市民（事業者を含む）から見て魅力がないということであり、住む場所・働く場所として選んでももらえないということである。したがって、都市間競争に打ち勝つには、都市が魅力である必要がある。

4. 都市の国際競争力

都市の総合力を評価したランキングに「Global Power City Index (GPCI)」がある。これは日本で開発された指標で、地球規模で展開される都市間競争下において、より魅力的でクリエイティブな人々や企業を世界中から惹きつける力こそが「都市の総合力」とあるとの観点に立ち、世界の主要都市の総合力を評価し、順位付けしたものである。都市の総合力を分析し、ランキングする調査研究として日本初の取り組みである。また、世界の各種機関が公表する既存のランキングのほとんどが、特定分野もしくは国別のランキングであるのに対し、都市の力を表す様々な分野を対象として都市の総合力を評価したランキングである。

世界を代表する主要40都市（図－1）を選定し、都市の力を表す主要な6分野「経済」「研究・開発」「文化・交流」「居住」「環境」「交通アクセス」と、さらに現代の都市活動を牽引する4つのグローバルアクター「経営者」「研究者」「アーティスト」「観光客」、並びに「都市の生活者」という5つのアクターの視点に基づき、複眼的に都市の総合力を評価するものである。

都市の力を表す6分野は、それぞれ複数の指標を用いて評価されている（図－2）。

日本の都市では「東京」「大阪」「福岡」が選定されている。この2013年度のランキング

1-2 GPCI-2013の対象都市

図1-2 対象40都市



図－1 GPCI－2013 の対象都市

広島には“都市計画”ではなく“都市戦略”を

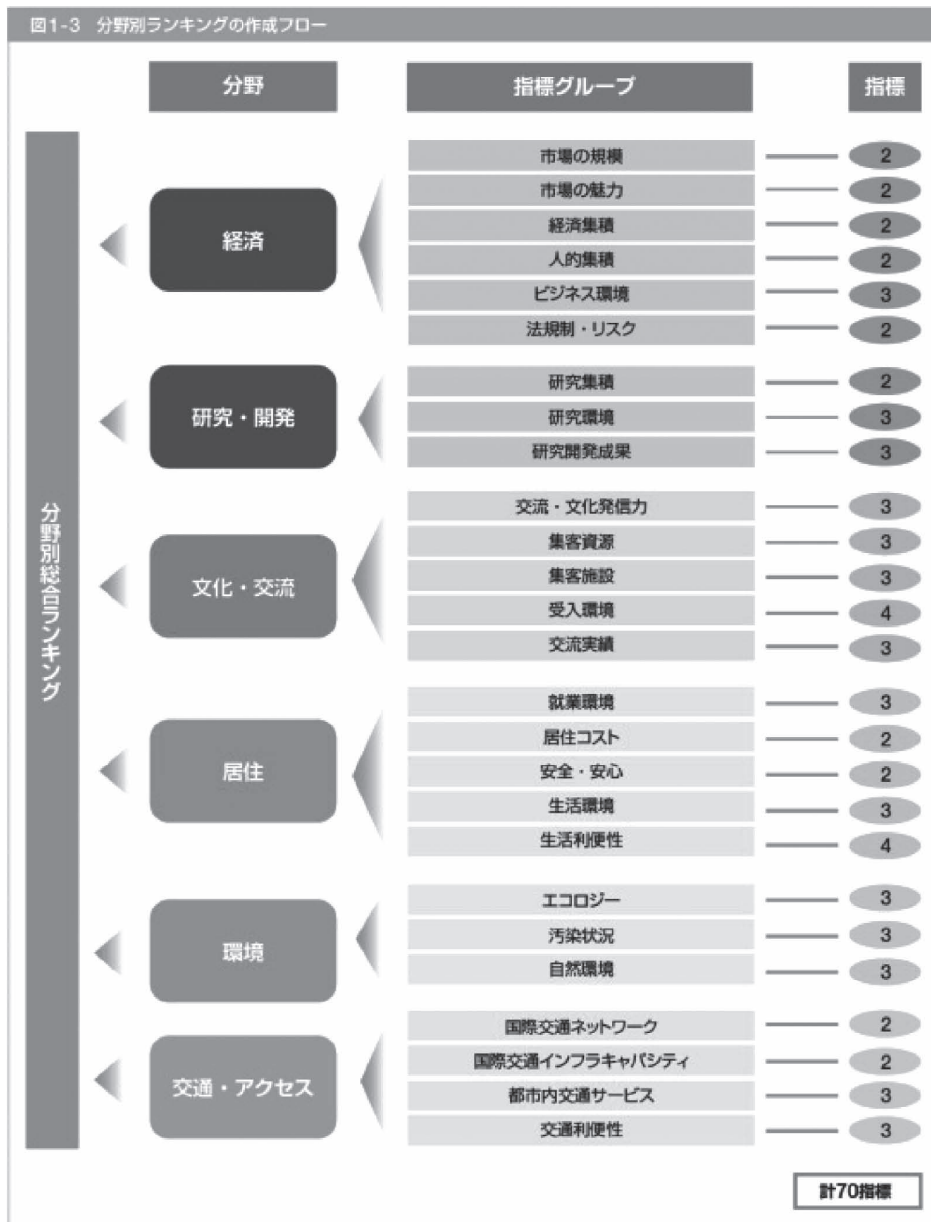
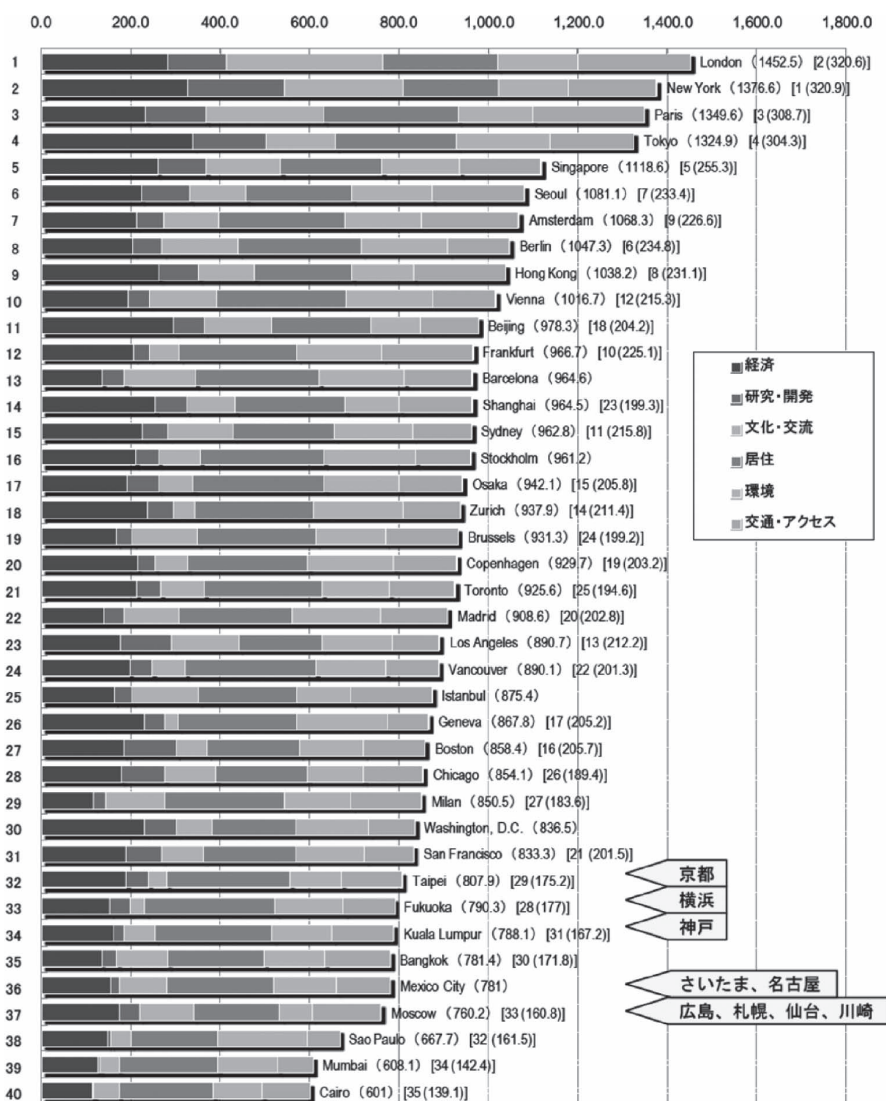


図-2 各分野の指標グループ

(GPCI-2013) によれば、東京が40都市中の4位、大阪が23位、福岡が35位である。1位はロンドン、2位はニューヨーク、3位はパリである。

5. 広島はどうか？

GPCI-2012では、上記の3都市以外で、国内の政令指定都市で人口が100万人以上である9都市（札幌，仙台，さいたま，川崎，横浜，名古屋，京都，神戸，広島）についても，世界主要都市と同じ基準で評価し，世界のグローバル都市と比較した日本国内都市の位置づけを明らかにしている。



図－3 GPCI-2012 における国内主要9都市の位置付け

広島には“都市計画”ではなく“都市戦略”を

表－１ 分野別ランキング

ランク	総合スコア		ランク	経 済		ランク	研究・開発		ランク	文化・交流	
1	London	1452.5	1	東京	338.9	1	New York	217.3	1	London	353.5
2	New York	1376.6	2	New York	327.5	2	東京	162.1	2	Paris	264.4
3	Paris	1349.6	3	Beijing	297.0	3	Paris	133.8	3	New York	263.7
4	東京	1324.9	4	London	282.0	4	London	130.8	4	Berlin	169.7
5	Singapore	1118.6	5	Hong Kong	262.9	5	Boston	117.8	5	Singapore	167.4
6	Seoul	1081.1	6	Singapore	259.4	6	Los Angeles	116.4	6	Barcelona	159.5
7	Amsterdam	1068.3	7	Shanghai	253.6	7	Seoul	109.1	7	東京	157.0
8	Berlin	1047.3	8	Zurich	236.4	8	Singapore	108.6	8	Los Angeles	150.4
9	Hong Kong	1038.9	9	Paris	234.1	9	Chicago	96.6	9	Beijing	150.2
10	Vienna	1016.7	10	Washington,D.C.	231.8	10	Hong Kong	88.7	10	Vienna	150.1
11	Beijing	978.3	11	Geneva	229.6	11	San Francisco	80.4	11	Istanbul	149.0
12	Frankfurt	966.7	12	Sydney	226.4	12	大阪	71.2	12	Brussels	145.3
13	Barcelona	964.6	13	Seoul	222.6	13	Shanghai	70.3	13	Sydney	145.3
14	Shanghai	964.5	14	Copenhagen	214.7	14	Washington,D.C.	70.1	14	Milan	128.6
15	Sydney	962.8	15	Toronto	212.6	15	Beijing	66.6	15	Seoul	126.6
16	Stockholm	961.2	16	Amsterdam	211.4	16	Berlin	64.9	16	Madrid	126.3
17	大阪	942.1	17	Stockholm	209.3	17	Amsterdam	61.8	17	Hong Kong	125.2
18	Zurich	937.9	18	Frankfurt	207.4	18	Zurich	59.9	18	Amsterdam	124.9
19	Brussels	931.3	19	Berlin	205.9	19	Sydney	57.7	19	Moscow	119.8
20	Copenhagen	929.7	20	Vancouver	196.2	20	Toronto	54.3	20	Chicago	114.7
21	Toronto	925.6	21	Vienna	194.6		京都	53.0	21	Bangkok	113.7
22	Madrid	908.6	22	大阪	191.1	21	Stockholm	51.9	22	Shanghai	109.7
23	Los Angeles	890.7	23	San Francisco	189.1		横浜	51.7	23	Mexico City	105.9
24	Vancouver	890.1	24	Taipei	189.1		名古屋	51.7	24	Toronto	97.6
25	Istanbul	875.4	25	Boston	182.8	22	Vancouver	51.5	25	Stockholm	93.5
26	Geneva	867.8	26	Chicago	178.5	23	Taipei	50.5	26	San Francisco	92.5
27	Boston	858.4	27	Los Angeles	175.6	24	Barcelona	49.8	27	Washington,D.C.	79.9
28	Chicago	854.1	28	Moscow	172.7	25	Vienna	47.4	28	大阪	76.2
29	Milan	850.5		横浜	169.5	26	Moscow	46.7	29	Vancouver	74.3
30	Washington,D.C.	836.5	29	Brussels	167.4	27	Geneva	45.6	30	Copenhagen	71.8
31	San Francisco	833.3		広島	163.4	28	福岡	44.6	31	Kuala Lumpur	71.3
	京都	830.4	30	Istanbul	162.3	29	Madrid	43.8	32	Boston	70.4
32	Taipei	807.9		名古屋	161.6		札幌	43.7	33	Frankfurt	67.3
	横浜	805.4		京都	160.8		仙台	42.4	34	Cairo	55.8
33	福岡	790.3	31	Kuala Lumpur	159.3		神戸	41.1	35	Zurich	47.8
	神戸	788.6		川崎	157.0	30	Copenhagen	39.9	36	Sao Paulo	43.9
34	Kuala Lumpur	788.1		神戸	154.2	31	Istanbul	39.8	37	Mumbai	41.6
35	Bangkok	781.4	32	Mexico City	154.2		広島	38.9	38	Taipei	41.4
36	Mexico City	781.0	33	福岡	153.4		川崎	37.4		京都	39.2
	さいたま	770.6		さいたま	151.3		さいたま	37.3	39	福岡	33.4
	名古屋	761.0		札幌	147.6	32	Brussels	35.8	40	Geneva	31.0
37	Moscow	760.2	34	Sao Paulo	146.9	33	Bangkok	35.6		神戸	17.6
	広島	755.4	35	Madrid	140.1	34	Frankfurt	34.7		広島	17.4
	札幌	745.7		仙台	136.9	35	Milan	29.3		横浜	17.4
	仙台	741.9	36	Barcelona	135.3	36	Kuala Lumpur	23.5		名古屋	11.2
	川崎	732.3	37	Bangkok	133.7	37	Mexico City	19.7		仙台	10.5
38	Sao Paulo	667.7	38	Mumbai	126.5	38	Sao Paulo	8.4		札幌	8.9
39	Mumbai	608.1	39	Milan	116.6	39	Mumbai	4.1		さいたま	3.3
40	Cairo	601.0	40	Cairo	113.6	40	Cairo	3.3		川崎	1.3

三 浦 浩 之

ランク	居 住		ランク	環 境		ランク	交通・アクセス	
1	Paris	298.7		東京	210.9	1	Paris	251.3
2	大阪	294.5	1	東京	208.4	2	London	250.6
3	福岡	292.4		神戸	206.1	3	Amsterdam	216.5
4	Vancouver	291.5	2	Stockholm	205.2	4	Seoul	206.3
5	Vienna	289.5	3	Geneva	203.2	5	Hong Kong	205.2
	名古屋	282.9	4	Zurich	202.7	6	Frankfurt	204.3
6	Amsterdam	280.0	5	Sao Paulo	199.8	7	New York	197.5
	広島	279.9		仙台	199.7	8	東京	187.5
	神戸	279.8	6	Madrid	196.1	9	Singapore	182.8
	札幌	278.4	7	Vienna	195.9	10	Istanbul	182.0
	京都	277.5	8	Berlin	193.7	11	Shanghai	162.4
7	Stockholm	277.5	9	Copenhagen	191.7	12	Brussels	161.8
8	Barcelona	277.3	10	Frankfurt	191.0	13	Milan	157.2
	さいたま	277.0	11	Barcelona	190.4	14	Moscow	154.8
9	Berlin	275.8		広島	187.6	15	Barcelona	152.4
10	Taipei	275.7		札幌	185.8	16	Madrid	149.3
	仙台	273.5	12	London	182.2	17	Toronto	146.9
11	東京	271.0	13	Seoul	179.5	18	Bangkok	146.8
12	Copenhagen	270.4	14	Sydney	174.9	19	Copenhagen	141.2
13	Milan	270.2	15	Singapore	174.0	20	大阪	140.7
14	Geneva	267.0	16	Amsterdam	173.6		川崎	139.7
15	Brussels	265.5		横浜	172.2	21	Vienna	139.1
16	Zurich	264.1	17	大阪	168.4	22	Boston	138.3
17	Toronto	263.9	18	Paris	167.3	23	Kuala Lumpur	138.2
18	Kuala Lumpur	262.2		名古屋	165.1	24	Berlin	137.4
19	Frankfurt	262.0		さいたま	164.7		横浜	137.3
	横浜	257.4	19	Washington,D.C.	161.9		さいたま	136.9
	川崎	256.9	20	Los Angeles	160.2	25	Taipei	135.4
20	London	253.4	21	Vancouver	157.1	26	Chicago	133.8
21	Madrid	253.0	22	New York	155.6	27	Sydney	131.8
22	Shanghai	245.4	23	Brussels	155.4	28	Beijing	130.3
23	Mexico City	239.9	24	福岡	153.5	29	Zurich	127.0
24	Seoul	237.0	25	San Francisco	152.7	30	Stockholm	123.7
25	Sydney	226.7	26	Toronto	150.4	31	Mexico City	119.9
26	Singapore	226.4	27	Milan	148.6	32	Vancouver	119.5
27	Beijing	226.3	28	Boston	143.5	33	福岡	113.0
28	Mumbai	222.7	29	Mexico City	142.0	34	San Francisco	110.6
29	Istanbul	221.9		川崎	139.9	35	Cairo	106.8
30	Hong Kong	218.3	30	Hong Kong	137.9	36	Washington,D.C.	104.2
31	Bangkok	215.9	31	Bangkok	135.6	37	Los Angeles	103.5
32	New York	215.0	32	Mumbai	134.4	38	Geneva	91.4
33	Cairo	211.7	33	Kuala Lumpur	133.6		神戸	89.7
34	San Francisco	208.0	34	Chicago	125.1		京都	88.9
35	Boston	205.7	35	Shanghai	123.0		名古屋	88.4
36	Chicago	205.4	36	Istanbul	120.4		札幌	81.2
37	Sao Paulo	196.8	37	Taipei	115.7		仙台	78.9
38	Moscow	195.3	38	Cairo	109.9	39	Mumbai	78.8
39	Washington,D.C.	188.7	39	Beijing	107.9	40	Sao Paulo	72.0
40	Los Angeles	184.7	40	Moscow	70.8		広島	68.3

広島には“都市計画”ではなく“都市戦略”を

評価の結果（図－3，表－1），京都，横浜，神戸が31位サンフランシスコと34位クアラルンプールの間に，さいたま，名古屋，広島，札幌，仙台，川崎が36位メキシコシティと38位サンパウロの間と，国内主要都市の実力は30位台となっている。

広島の位置付けは次のようである。

経済	29位と30位の間	＜横浜，名古屋，京都＞と同レベル
研究・開発	31位と32位の間	＜川崎，さいたま＞と同レベル
文化・交流	40位よりもかなり下	＜神戸，横浜＞と同レベル
居住	6位と7位の間	＜神戸，札幌，京都＞と同レベル
環境	11位と12位の間	＜札幌＞と同レベル
交通・アクセス	40位よりも下	＜ × ＞

さらに，森記念財団が2010年に作成した「世界の都市総合力ランキング Global Power City Index 2010」（GPCI-2010）の調査結果を活用しつつ，広島を対象として GPCI-2010 に対応した指標を収集，スコアを算出し広島の都市力を評価した「都市地域の活力強化に係る調査検討業務」がある。そこでは，GPCI 調査対象となっている世界の主要な35都市（現在の調査対象都市は40）の評価結果に対応した広島の評価を実施することにより，世界のグローバル都市との比較の中での広島の位置づけを明らかにし，その都市力を分析している。

この評価よれば，広島の弱みは以下のとおりである。

① 交流・文化発信力，宿泊環境，集客面が弱い

◇劇場・コンサートホール，美術館・博物，ハイクラスホテルが少ない

◇スタジアムが少ない

② 国際交通インフラ，都市内交通インフラが弱い

◇都市から国際空港までのアクセス時間が長い（他都市30分に対し1時間）

◇国際線直行便就航都市数，国際線旅客数が圧倒的に少ない。

これを鑑みると，サッカースタジアムの整備により，広島の弱みを多少なりとも改善できる可能性のあることが伺える。スタジアムは，広島の魅力向上，にぎわい創出のための重要なツールになり得るものであり，また，サッカーを通じた地域交流や国際交流も期待できる。さらに，国内外の多くの人々に集ってもらえるようなサッカースタジアムを作ることができれば，「交流・文化発信力」，「集客力」を高めることになり，それに伴って，「宿泊環境」が良化し，国際線直行便就航都市数，国際線旅客数の増加も期待できる。

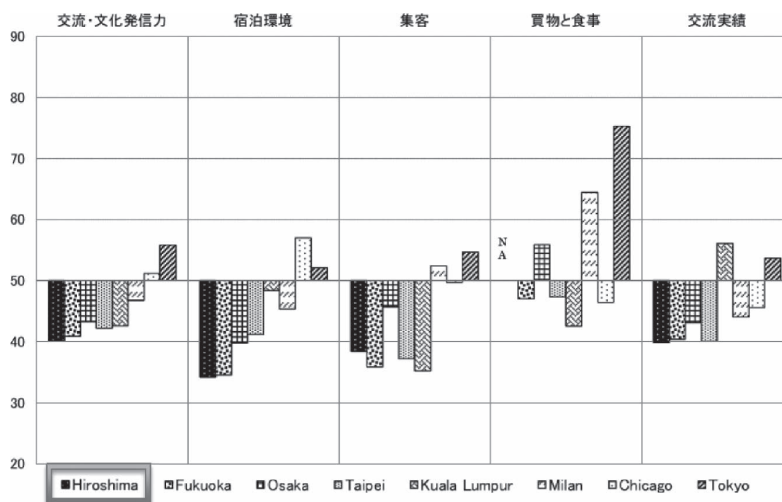
スポーツにより「まちづくり」を進めるという発想である。

このようなスポーツをコアとした戦略的なまちづくりの考え方を次で示していく。

1) - 3. 「文化・交流」《広島：36位》

＜指標グループによる偏差値比較分析＞

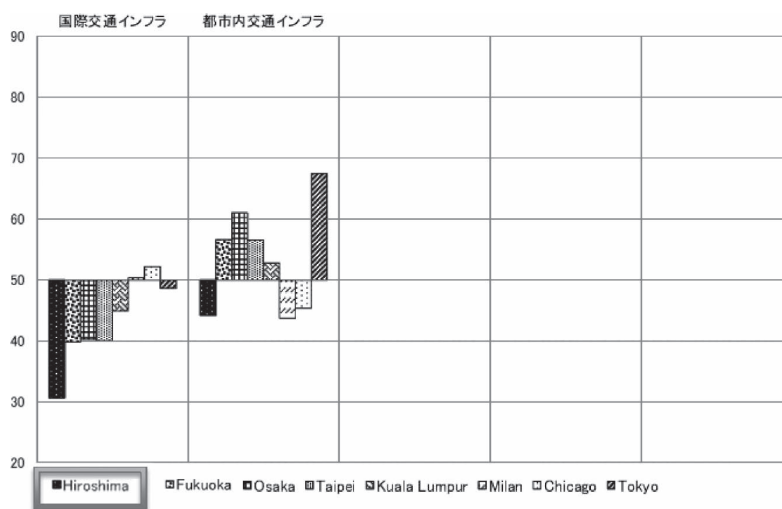
広島は最も弱い分野であるが、どの指標も偏差値 50 を大きく下回っている。ただし東京を除く国内都市も軒並み偏差値 50 以下であり、国内では十分に競争力を発揮する余地があるとも考えられる。



1) - 6. 「交通・アクセス」《広島：36位》

＜指標グループによる偏差値比較分析＞

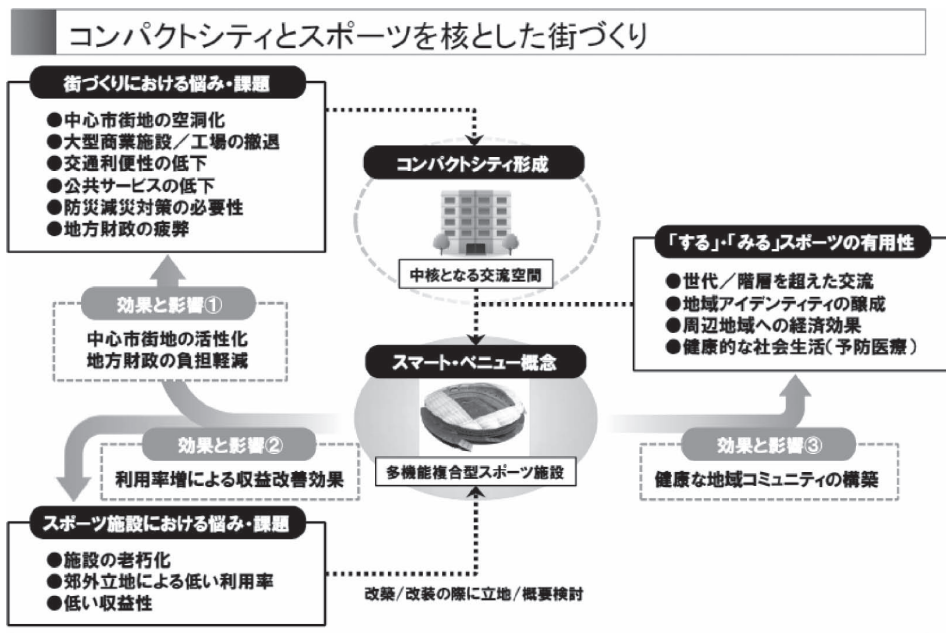
「文化・交流分野」に次ぐ広島の最大の課題である分野が「交通・アクセス」である。国内交通、国際交通いずれも偏差値 50 を切り、特に「国際交通インフラ」は極めて評価が低く、これがグローバル人材を吸引するにあたっての最大の障害である。この点をクリアしない限り広島は真のグローバル都市の仲間入りはできない。



6. スマート・ベニュー

スポーツを核とした街づくりを担う「スマート・ベニュー」という手法が提案されている。これは、今後の街づくりには、単機能型のスポーツ施設ではなく、公共施設や商業施設との複合型など街づくりの中核拠点となり得るサステナブルなスポーツ施設が必要ではないかという考えによるものである。

「周辺のエリアマネジメントを含む、複合的な機能を組み合わせたサステナブルな交流施設」を「スマート・ベニュー」と位置付けていくもので、スタジアム・アリーナ等にとくに着目している。スタジアムやアリーナ等を、多機能型（商業施設複合等）としてその建設・運営に民間活力を導入し、今、求められている新しい形の街づくりである「コンパクトシティ」に沿った街なか立地を行って、収益性改善を図るスキームである（図－4）。



図－4 スマート・ベニューによるまちづくり
＜日本政策投資銀行資料＞

なお、コンパクトシティとは、郊外への都市的土地利用の拡大の抑制、中心市街地の活性化等を図るため、暮らしに必要な諸機能が近接し、効率的で持続可能な都市のことであって、次のような都市の抱える課題を解決する手段である。

1. 地方財政の悪化
 - ・人口減少による税収額の減少
 - ・高齢化社会の到来による地方財政への負担増
2. 中心市街地の疲弊
 - ・市街地の地価高止まり，モータリゼーション進展等による郊外展開・拡散
 - ・通信販売等の拡大，郊外大型店舗等，厳しさを増す中心市街地の店舗経営環境
 - ・中心市街地の「非経由」，「素通り」
 - ・地域工場の撤退等まち全体を支える雇用の創出，人材の流出
3. 地域コミュニティの消失
 - ・地域コミュニティ・交流空間の消失
 - ・地域アイデンティティの消失

7. サッカースタジアムの建設場所選定

都市計画における都市づくりにおける方向性を実現化するための戦略的要素の欠如，グローバルな都市間競争時代を鑑みたときの広島の“弱み”の解消，そして「スマート・ベニュー」という新たなまちづくりの方向性を踏まえると，サッカースタジアムの建設を広島の弱みを克服するうえで有効な「都市戦略」と捉えることができる。広島の弱みをサッカースタジアムの整備により改善し，新たな魅力要素としていくのである。

スタジアムは，広島の魅力向上，にぎわい創出のための重要なツールになり得るものであり，また，サッカーを通じた地域交流や国際交流も期待できると考えられる。国内外の多くの人々に集ってもらえるようなサッカースタジアムを作ることができれば，「交流・文化発信力」，「集客力」を高めることになり，それに伴って，「宿泊環境」が良化し，国際線直行便就航都市数，国際線旅客数も増加できるのではないだろうか。

一方，「広島県及び広島市のまちづくりの方向性」は，このような面を捉えているのだろうか？ そこで，サッカースタジアム建設候補地（図－５）【中央公園自由広場・芝生広場等】【旧市民球場跡地】【広島みなと公園】におけるまちづくりの方向性を見てみたい。

（１）中央公園自由広場・芝生広場等

中央公園の自由広場・芝生広場等に関しては，旧市民球場跡地委員会における議論の参考としていくため，広島市関係各課で構成する庁内検討会議が設けられた。そこでは，中央公園の将来像を思い描きながら，既存施設の利活用や周辺地域を含む回遊性向上の方向性など

広島には“都市計画”ではなく“都市戦略”を



図－5 広島市内にある大規模未利用地

について検討を進められ、その成果が旧市民球場跡地委員会において、「中央公園の今後の活用にかかる検討状況（中間報告）」（平成24年11月）として示された。これより、中央公園自由広場・芝生広場等の都市づくりにおける位置づけを明らかにしていく。

中央公園は、戦災復興のシンボルとして整備され、都心における緑豊かな空間として本市の個性と魅力ある都市空間の形成に大きな役割を果たしてきた（図－6）。中央公園内には、各種公共施設が立地しているが（図－7）、各々の老朽化が進行しており、機能面でも課題を抱えている。長期的には時代のニーズを踏まえた建替・再配置を検討しなければならない。

こうした問題認識のもと、活用にあたっての方向性として、次のものが示された。

中央公園の持つ様々な特性を生かしつつ、欧米の成熟した都市の類似例にみられるようなシンボリックな空間となるよう、3つの空間特性を備えたものとする。

[にぎわいの空間]

若者を中心とする多くの市民や平和記念公園を訪れる観光客を引き付ける、魅力あ

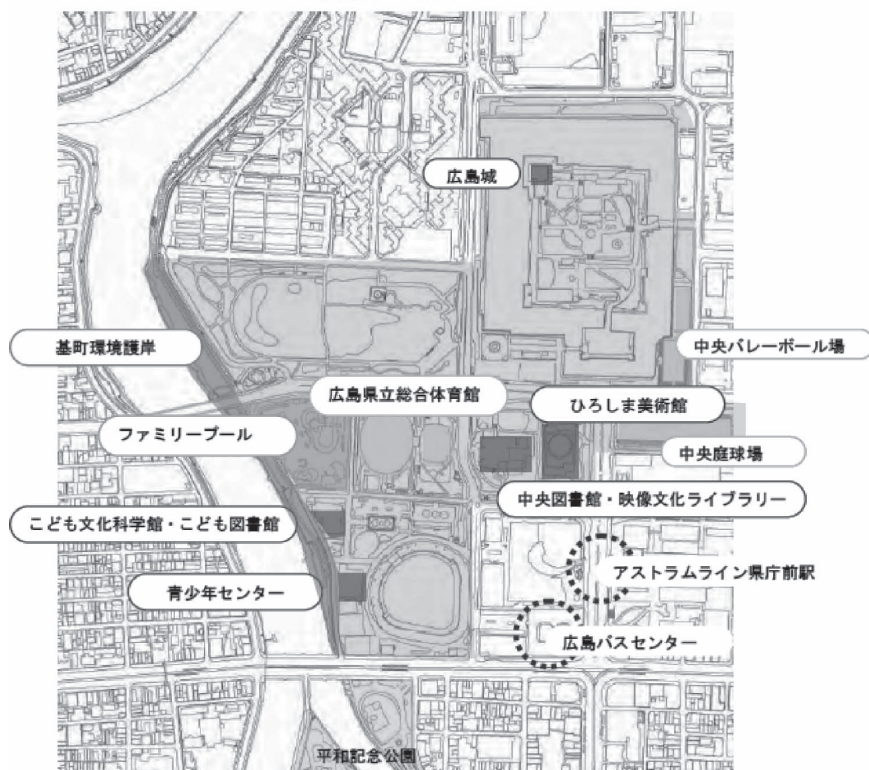
〔上空からみた中央公園〕



中央公園は中四国最大の商業業務地である紙屋町・八丁堀地区に隣接し、周辺には、世界文化遺産である原爆ドームを含む平和記念公園、広島バスセンターやアストラムライン県庁前駅などの交通施設、基町クレドや地下街シャレオなどの商業施設、基町住宅などが立地している。

図－6 中央公園

—各施設の立地状況—



図－7 中央公園における各施設

るにぎわいの空間とする。

[くつろぎの空間]

広島の特徴である「水」と「緑」を生かしながら、都心部における花と緑にあふれたくつろぎの空間とする。

[文化を醸し出す空間]

国際平和文化都市の顔として、広島の歴史を踏まえつつ、質の高い文化・芸術・スポーツを満喫することができる、また発信する空間とする。

その上で、空間づくりとして各エリアを次のように考えている。

1) 芝生広場

都心に残る貴重な緑を生かし、家族連れを中心に安心して訪れ、憩うことができるゾーンとする。

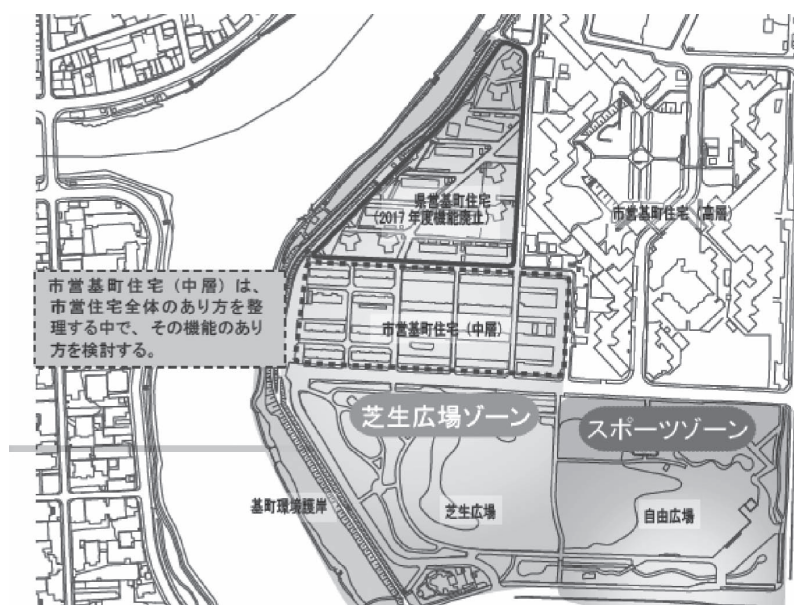
そのため、短期的には芝生広場西側の樹林帯に常設の冒険遊び場を設置し、長期的には市営基町住宅（中層）を機能廃止する場合には、県営基町住宅を含めて公園区域に編入し、既存の芝生広場や基町環境護岸と一体的な芝生広場として再整備する。さらに、ステージや飲食物販施設を整備することも提案されている。

2) 自由広場

多様化するスポーツ需要に対応したスポーツ交流のゾーンとする。ただし、旧市民球場跡地にスポーツ複合型施設が整備される場合には、自由広場部分はイベントゾーンとする。

これより、自由広場はスポーツ交流ゾーンとして位置づけられており、自由広場にサッカースタジアムを整備することは、スポーツ交流の場という都市づくりでの位置づけにマッチしている。

また、芝生広場については、市営基町住宅（中層）を機能廃止する場合には、県営基町住宅を含めて公園区域に編入し、既存の芝生広場や基町環境護岸と一体的な芝生広場として再整備するとしている。サッカースタジアムは陽射しによる試合への影響が出ないように南北に配置することが推奨されており、隣接する市営基町住宅（高層）住民への騒音等の影響をできるだけ抑えていくことも考えると、芝生広場の機能を自由広場に移し、市営基町住宅（中層）と県営基町住宅の跡地にスタジアムを建設することは、中央公園の活用として相応しいといえる。



図－８ 基町住宅と芝生広場，自由広場

(2) 旧広島市民球場跡地

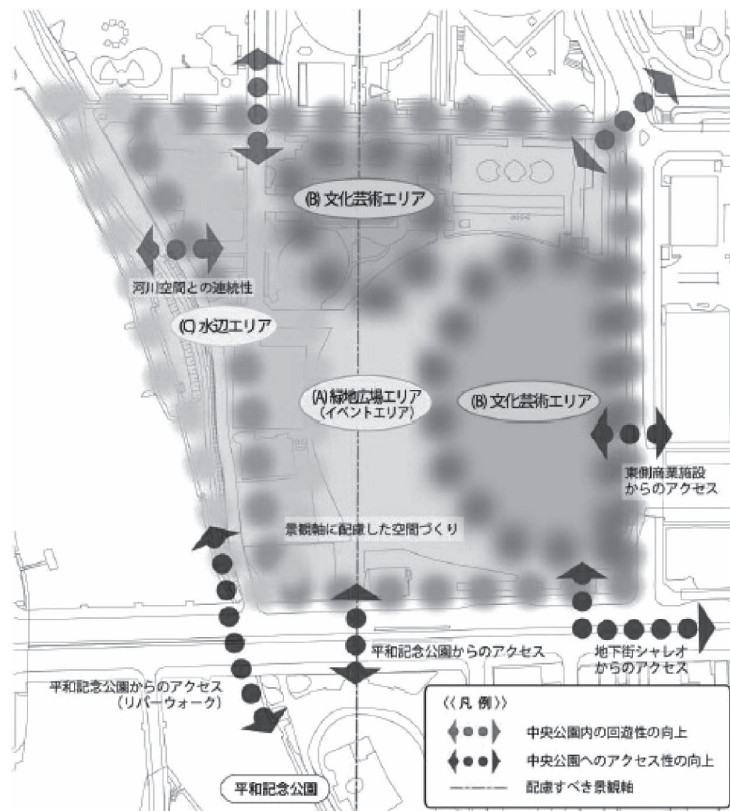
旧広島市民球場跡地を含む紙屋町・八丁堀地区は、広島駅周辺地区とともに、広島市の活性化を図る上で重要な拠点となる地区であり、より一層魅力を高めていく必要があると位置づけられている。また、旧市民球場跡地を含む中央公園は、平和記念公園などとともに、戦災復興のシンボルとして整備された都市公園であり、広島市の魅力ある都市空間の形成に大きな役割を果たしているとされている。

旧市民球場跡地の活用については、平成17年9月に新球場をJR広島駅東の貨物ヤード跡地に建設することを決定して以降、様々に議論されてきた。旧市民球場跡地の活用については、これまでの都市づくりの歴史を踏まえ、広島市において、引き続き、都市公園として利用することを前提とした検討が進められ、平成21年1月に「現球場（広島市民球場）跡地利用計画」（以下「従前利用計画」という。）が策定された。

その後、平成23年4月に松井市長が就任して、この従前利用計画は見直し新たな活用方策を策定することとなり、その取組の一環として、各界各層から意見を聴く「旧広島市民球場跡地委員会」が設置された。

この委員会では、「若者を中心としたにぎわいのための場」としていくという方向性の下、長期的な視点とまちづくりの視点から、旧市民球場跡地に導入することが望ましい機能は、「文化芸術機能」と「緑地広場機能」を中心とする機能及びこれらを補完する機能とされた。その上で、図－9に示すように、(A) 緑地広場エリア（球場跡地中央のエリア）、(B) 文化

広島には“都市計画”ではなく“都市戦略”を



図－9 球場跡地活用イメージ

芸術エリア（球場跡地東側及び北川のエリア）、（C）水辺エリア（球場跡地西側のエリア）を設定した。3つのエリアへ機能の具体的な配置については、平和記念資料館本館下から原爆死没者慰霊碑及び原爆ドームを見通したときの景観軸に配慮するとともに、エリアごとに段階的かつ着実に進めることとしている。これは、同軸が広島市の都市づくりにあって、特に重視すべきものとされてきた経緯を踏まえたものである。

なお、検討の最終段階では「スポーツ複合型機能」も挙げられていたが、これについては、“市民の間様々な意見がある中で、4月以降立ち上げることが見込まれるサッカースタジアム建設に向けた協議会での議論を経た上でなければその具体像を確定することが困難な状況にあることから、現時点では球場跡地への導入対象から除外して考えることとする。”とされた。

したがって、旧市民球場跡地は、「若者を中心としたにぎわいのための場」とする基本姿勢はあるものの、スポーツ（サッカー）によりにぎわいを生み出す場としていくかどうかを結論づけておらず、私が会長として進めてきたサッカースタジアム検討協議会に、言わば“下

駄を預けた”状態になっている。

また、旧市民球場跡地は中央公園内にあり、そのことより、広島市の庁内検討会議により提示された「中央公園の活用に当たっての方向性」を踏まえることが、ひとつの制約となっている。すなわち、中央公園は、①[にぎわいの空間] 若者を中心とする多くの市民や平和記念公園を訪れる観光客を引き付ける、魅力あるにぎわいの空間とする。②[くつろぎの空間] 広島の特徴である「水」と「緑」を生かしながら、都心部における花と緑にあふれたくつろぎの空間とする。③[文化を醸し出す空間] 国際平和文化都市の顔として、広島の歴史を踏まえつつ、質の高い文化・芸術・スポーツを満喫することができる、また発信する空間とする。こととなっており、これが跡地利用での機能を「文化芸術機能」と「緑地広場機能」としたことに密接に結びついている。

さらに、この地は復興のシンボリックな場所とされ、都心における緑豊かな空間を提供することと、ヒロシマというまちの個性と魅力を発信することを担っていると位置づけている。

以上より、旧広島市民球場跡地にサッカースタジアムを建設することは、確かに「若者を中心としたにぎわいのための場」を生み出すという大きなこの場の利用の意図に沿っているが、その一方で、この場が担っている“復興のシンボル”、“ヒロシマの個性と魅力を発信する”ことを為し得るものとなるには乗り越えるべき事項が多く、かつ、スタジアムコンセプトやデザインに十分な留意が必要となる。さらに、国際平和文化都市の顔として文化を醸し出す空間と成れるのか、スタジアム建設により花と緑にあふれたくつろぎの空間が失われることをどう意味づけて納得するのかという課題がある。

(3) 広島みなと公園

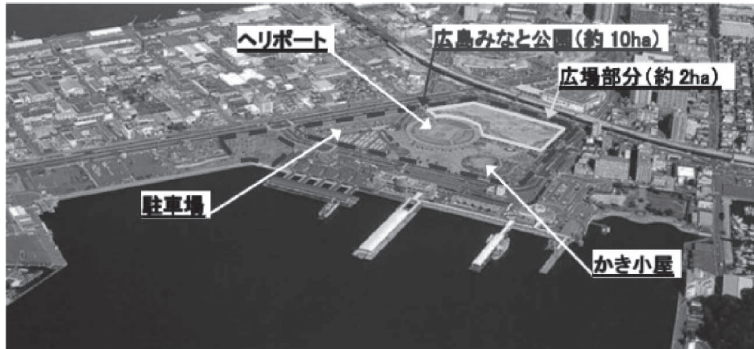
現況では、臨海部の貴重なオープンスペースとして、緑地レクリエーションの場（緑地、広場、駐車場）や大規模災害時の防災拠点（臨時ヘリポート等）となっている。みなとの賑わいを創出する取り組み「みなとオアシス広島」関連のイベントを開催（年間60回程度）している。

この場所の位置付けは、公園・緑地等の「みなと」の資源や民間の活力を活用し、多くの来訪者が親しめるにぎわい空間を創出することとなっている（広島市都市計画マスタープラン）。

また、広島港港湾計画（広島県）においては、宇品地区は広島海の玄関として旅客輸送機能の強化や潤いのあるウォーターフロント空間を形成する地区であり、広島みなと公園はこの地区の中心施設として広く市民に利用される緑地として位置づけられている。さらに、災害対策基本法により救援物資輸送拠点としての位置づけもなされている。

以上のように、この場所は、にぎわい空間、憩いの空間、かつ、防災拠点として位置づけ

広島には“都市計画”ではなく“都市戦略”を



られており、サッカースタジアムに防災機能を付加すれば、これら都市づくりの方向性にマッチするものとなる。

8. 都市戦略としてのサッカースタジアム建設

以上、3つの候補地におけるまちづくりの方向性を整理してきたが、いずれの候補地においても、その方向性とサッカースタジアム建設は合っており、候補地を決定するだけの優位な差は無い。“広島に相応しいスタジアム”とは何か？どれを実現するにはどの候補地が相応しいのかを、別の判断指標を導入して示していく必要がある。目指すべきサッカースタジアムが、市民とともに創られ、世界に誇れる国際平和文化都市「広島」を具現化するスタジアムでなければならない。

そのために必要なのは、広島市都市計画マスタープランで示された候補地及びその周辺地でのまちづくりの方向性との整合性に加えて、用地条件（規模制約・拡張性・法的制約）、環境条件（周辺環境）といった、その場の物理的な条件がスタジアム建設に対応できるものであるかを評価する必要がある。

さらに、アクセス性、牽引力（広島都市圏の発展を牽引するための中核性・求心力が得られる場所か）、発信性（広島を印象づけられる施設・場所となり得るか）、付加機能、防災機能、周辺機能との連携、経済やまちづくりへの波及効果、コスト性（整備・運営維持管理）、迅速性といった評価項目を、比較検討していく必要がある。

そして、何よりも重要なのは、各候補地の場所の特性（力）を考慮して、スタジアムのコンセプトを創案し、デザインすることである。そのためには、県民・市民・関係者等の意見を聞くことも必要であろう。

広島県の県民・市民にとって、サッカー専用スタジアム整備は重要な関心事である。建設場所選定には、多種多様な意見があり合意形成は困難も予想される。広島には「都市間競争」

に打ち勝つための「都市戦略」が必要であり、選定される建設場所は、「都市戦略」に基づくものであるとの理論を展開していくことが、強く求められている。

「都市」や「まち」とは、一度しかない人生において、ここに住んでよかったと感じる場所でなければならないと考える。そのような場所を生み出すツールは、「都市計画」ではなく、「都市戦略」であると考えている。

参 考 資 料

- (1) 国土交通省「第7版 都市計画運用指針」平成26年8月
- (2) 広島市都市計画マスタープラン，平成25年8月
- (3) 財団法人 森記念財団 都市戦略研究所，GPCI-2013
- (4) 財団法人 森記念財団 都市戦略研究所，GPCI-2014
- (5) 財団法人 森記念財団 都市戦略研究所，「都市地域の活力強化に係る調査検討」平成23年10月
- (6) 第6回旧広島市民球場跡地委員会資料「中央公園の今後の活用に係る検討状況（中間報告）」
- (7) 第6回サッカースタジアム検討協議会における説明資料「旧市民球場跡地について」
- (8) 旧広島市民球場跡地委員会「旧広島市民球場跡地の活用について」平成25年2月
- (9) 旧広島市民球場跡地委員会「旧広島市民球場跡地の活用方策」平成25年3月